

E・ハーバート・ノーマンと鈴木安蔵

――戦後初会談の日程について――

ハーバート・ノーマン略歴

歴史家・外交官 E・ハーバート・ノーマンは、1909年9月1日、長野県軽井沢でカナダ系宣教師の第3子（次男）として生まれた。トロント大学、ケンブリッジ大学、コロンビア大学、ハーヴァード大学で学んだのち、カナダ外務省に入省した。第二次世界大戦後、ノーマンは合衆国の要望によって連合国軍総司令部に勤務。そこで占領下日本の民主化と改革に尽力した。1946年8月、駐日カナダ臨時外交代表部（Canadian Liaison Mission）に配属され、1951年9月にサンフランシスコ対日講和条約のカナダ代表へのチーフ・アドバイザーを務める。1953年にはニュージーランド高等弁務官、1953年にはエジプト大使、レバノン大臣に就任。



ノーマンの最たる貢献は、1956年のスエズ危機における、安全と平和を守る国連緊急軍の配備で果たした彼の役割であった。冷戦期の狂信的なマッカーシズムの嵐に巻き込まれ、1957年4月4日、カイロ着任中に自らの命を絶った。

(Cited from the site Government of Canada)

1. これまでの諸説と本報告の示す新説

鈴木安蔵がノーマンから直接、新憲法に関する示唆をうけたという終戦直後の会談については、その日時についてこれまで複数の説があった。

まず日本国憲法制定史の権威である古関彰一は、1945年9月22日（土）とする。これは古関が1981年7月20日に鈴木本人にインタビューをした折、鈴木は日記を繰りながら話した⁽¹⁾との事実が根拠であり、「ある日突然、ノルマン氏が都留重人氏の案内でやってきた」

⁽¹⁾ 古関彰一『日本国憲法の誕生』増補改訂版、岩波書店、2017年、41頁、注9。なおこの鈴木日記は、鈴木安蔵門下の金子勝・立正大学名誉教授によれば、残念ながら現存を確認できないとのこと。

(2)というのが鈴木の説明である。

いっぽうノーマンの右腕とも呼ぶべき大窪愿二⁽³⁾は、ノーマン全集第4巻収載の年表に9月25日(火)と記している。この日付にも根拠はある。ノーマンが妻アイリーン(Irene)に書き送った手紙の日付が25日であり、その中に「今日、鈴木安蔵に会った」⁽⁴⁾と書かれているためである。ただ、おそらく実際には、会った当日に手紙を書いたとは限らないので、総合的に見て、これまでのところ古閑説が強かったのであろう。

筆者が2016~17年にかけて調査したUBC所蔵資料E. Herbert Norman fondsのうち、上記アイリーン宛の手紙のほか、この問題に関係の深いものとして、冒頭に「東京旅行(Tokyo Trip)」と書かれたメモの束⁽⁵⁾(以下「ノーマン日記」と呼ぶ)がある。このメモの内容を検討した研究を筆者は寡聞にして知らないが、戦後すぐのノーマンの思考や足取りがわかる貴重な資料である。このメモによれば、「鈴木安蔵教授と会った(Met Prof. Suzuki Yasuzo)」とあるのは9月22日(土)ではなく23日(日)となっている。この23日というのが本報告の提唱する第3の説となる。

2. ノーマンの日記

ノーマン日記によれば、22日(土)は、東京帝国大学とくに明治新聞雑誌文庫を訪問し、ノーマン旧知の、当時そこに寝泊まりしていた宮武外骨らと会話したあと、神田の書店を覗いた等とある。日記の手書きの筆跡がかなりの悪筆で、判読困難かつ文法不完全であるが、可能なかぎり補完しつつ翻訳すると以下のようなになる(判読できない部分は__とした。またカッコ内に固有名詞を補った)。

〔東京〕帝国大学を訪問。高木〔八尺〕⁽⁶⁾は不在。明治〔新聞雑誌〕文庫に立ち寄る。自由民権運動に関する左派・リベラルの良い論文雑誌は全て保存のため山形に送った、と西田長壽⁽⁷⁾氏。宮武(廃姓⁽⁸⁾外骨)が裏手から表れ、我々を見て喜んだ。彼の家は焼

(2) 鈴木安蔵『憲法学三十年』評論社、1967年、210頁。

(3) 大窪愿二は、日本太平洋問題調査会事務局を経て駐日カナダ大使館勤務で、本学会設立の功労者でもある。ノーマンの活動を公私にわたりサポートし、ノーマンの死後はノーマン全集を編纂した。大窪愿二追悼集刊行会編『追想 大窪愿二』大窪愿二追悼集刊行会、1987年参照。

(4) “I met Suzuki Yasuzo to-day, the scholar who helped me in finding books on constitutional history. His views were most interesting and practical.” E. Herbert Norman to Irene Norman, 25 September 1945, Tokyo (Japan), Box 1 File 8, Norman Family fonds, University of British Columbia Library Rare Books and Special Collections, Vancouver, Canada.

(5) E. Herbert Norman, Notes from Tokyo visit [ca. 1945], Box 7 File 2, E. Herbert Norman fonds, University of British Columbia Library Rare Books and Special Collections, Vancouver, Canada.

(6) 高木八尺は、東京帝国大学教授。ノーマンとは戦前より太平洋問題調査会(IPR)の活動などを通じて交流があった。

(7) 西田長壽は、当時館長であった宮武外骨の助手。西田長壽『明治新聞雑誌文庫の思い出』《リキエスタ》の会、2001年参照。

(8) 外骨は一時、姓を廃すと宣言し「廃姓 外骨」を名乗っており、ノーマンはそれをそのままにメモしている。なお著者の調査によれば、現在UBCに寄贈されているノーマンの蔵書のうち、最も冊数の多

かれ、図書館の地下に住んでいる。軍閥に対して怒りを表し、「軍閥よく_____られてください」と言う。

明治の本を何冊か購入。神田の一誠堂、巖松堂はいまだによいコレクション⁽⁹⁾。

25 日付アイリーン宛手紙⁽¹⁰⁾はここから書き起こしたと思われ、内容がほぼ一致している。上記で判読できなかった部分は、「貴方が、軍閥の連中を地獄に叩き落としてやってほしい」ということを述べているとこの手紙から推測できる。

2. 宮武外骨の日記

他方、外骨の日記は、その甥の吉野孝雄により『外骨戦中日記』として公刊されており（以下「外骨日記」と呼ぶ）、1945 年 9 月 22 日から 25 日までは次のような記述となっている。

9 月 22 日 土 晴 米兵 3 人 「三代美人」
23 日 日 晴 「芝居」ハガキ藤本へ
24 日 月 晴 米兵 2 人 隣室能子
25 日 火 晴 「病院」成る⁽¹¹⁾

外骨の記述はほんとうに一件につき一言ずつである。「三代美人」は藤本氏に譲った絵葉書のタイトルで、ノーマンとは無関係である。ノーマンは「我々を見て喜んだ (delighted to see us)」と複数形で自分たちを記述しているので、この「米兵 3 人」が（実際には米兵ではないものの）ノーマン一行を指すと考えて矛盾はない。つまり 22 日についてノーマン日記、アイリーン宛手紙、外骨日記は整合しており、鈴木安蔵と会ったという記録はそこにはない。

他方「鈴木安蔵と会った」と書かれているノーマン日記 23 日の記述は、レターサイズの手書きのノート 5 ページにもわたり、当然ながらノーマンの発言よりも鈴木安蔵の発言が詳しく記録されている。

3. 都留重人の日記

ここでさらなる確認のため、現場に居合わせた都留重人に着目してみた。ノーマンと鈴木安蔵の関係を重視している原秀成は、都留重人からの私信をもとに「この当時、都留重人は

い著者こそ宮武外骨であるという事実を付記しておく。

⁽⁹⁾ E. Herbert Norman, Notes from Tokyo visit [ca. 1945].

⁽¹⁰⁾ “I have visited the Imperial University, seen the Meiji Library (all the most valuable left-liberal journals and collections of that era were sent to the country for protection). I met the old curator who remembered me and who said “I’ve been opposed to militarism all my life (it’s true his writings are quite anti-militarist) and now my house is destroyed and I’m living on beans at the age of 84. I hope you give the militarists hell”. E. Herbert Norman to Irene Norman, 25 September 1945.

⁽¹¹⁾ 吉野孝雄『外骨戦中日記』河出書房新社、2016 年、217 頁。

日記をつけておらず……」⁽¹²⁾と記述しているが、筆者自身で念のため調べてみると、都留重人が学長を務めた一橋大学の経済研究所資料室に、ちょうどこれらの日の出来事が記述されている大学ノート型の日記（以下「都留日記」と呼ぶ）が実は存在することがわかった。

都留日記 22 日の記述によると、ノーマンら 3 人を招いたのは夕食時であり、ノーマンの日中の動向は書かれていない（以下旧字体は新字体に修正した）。

……夕食にはノーマン、ウッツワース、ニーランズを招いて寿焼。途中クリベージをしたりして和やかに一夕をすごす。日本語ローマ字化、および日本式・ヘボン式の問題でノーマンと議論。ノーマンはいずれの問題においても保守的見解を支持。三人は 11 時半まで腰を揚げない⁽¹³⁾。

外骨日記 22 日の「米兵 3 人」とは、おそらくこのノーマン、ケン・C・ウッツワース (Ken C. Woodsworth)、D・E・ニーランズ (D. E. Neelands) の 3 人であろう。彼らはいずれもカナダ人であるが⁽¹⁴⁾、英語の話せない外骨⁽¹⁵⁾から見れば米兵も同じだったろう。彼らは 22 日（土）日中に帝国大学に立ち寄り、高木八尺の不在を確認したのち、明治文庫に立ち寄り、そこで旧知の宮武外骨および助手の西田長壽と再会し（日本語で）会話した。そして神田の書店に立ち寄った。都留重人宅⁽¹⁶⁾に夕食に招かれ、夜遅くまで歓談した。かつ、3 人はそのまま宿泊したらしい。翌日 23 日（日）に「ウッツワース、ニーランズ最後の夕」とあるのでこの 2 人は 23 日まで滞在したと考えられ、ノーマンだけは翌午前中も都留と行動しているので、さらに滞在を続けていると読める。

整理すると、夕食に招かれた 3 名はその晩宿泊した。翌 23 日の午前中、鈴木安蔵が都留宅を訪ねてきてノーマンと再会、新日本建設について都留重人も交えて立ち入った議論をした。以上が真相のようである。

また都留日記 24 日には「午前中、エマソン、ノーマンとギーブで帝大にゆき、神田、本郷の古本屋を歩き、高木教授と大学の食堂で中食をした」とある。ならば外骨日記の「米兵 2 人」とはジョン・K・エマーソン (John K. Emerson) とノーマンであろう。一件一言の原則により、都留のことは省略されたようである。

⁽¹²⁾ 原、前掲書、第 III 巻、200-201 頁、および注 489。

⁽¹³⁾ 一橋大学経済研究所資料室所蔵、都留重人名誉教授寄贈資料、Aa-30、1945 年 9 月 22 日の部分。

⁽¹⁴⁾ Elliot, Major S.R. *Scarlet to Green: A History of Intelligence in the Canadian Army 1903-1963*, second edition, FriesenPress, 2018, p. 369; pp. 481-482.

⁽¹⁵⁾ 吉野、前掲書、218 頁。

⁽¹⁶⁾ 当時都留夫妻は、妻正子の父・和田小六郎の敷地内に、和田小六の兄・木戸幸一内大臣とともに住んでいた（都留重人『いくつもの岐路を回顧して』、岩波書店、2001 年、204 頁）。原秀成は、都留からの私信にもとづき、ノーマンが都留を訪ねた日程を 9 月 11 日（火）、あるいは 9 月 15 日の数日前、としているが結局ははっきりしない（原、前掲書、第 III 巻、199 頁）。他方ノーマン日記には、ノーマンが 9 月 13 日（木）に初めて和田家を訪れたこと、その場に都留重人と嘉納履方（ノーマンの友人、同盟通信社記者、嘉納治五郎の三男）がいたことなどが明確に記されている。

4. 会談日程の整理

今回筆者が参照したノーマン日記も都留日記と、既知の全ての情報を総合すると、問題の日付は9月22日ではなく23日であったと考えられる。また鈴木自身や古関が述べているように都留がノーマンを連れて鈴木を訪ねたのではなく、実はノーマンが宿泊している都留宅（和田邸）に鈴木が訪ねてきたのであった。

以下に1945年9月22～25日のノーマンおよび都留重人の足取りをまとめ、括弧内に根拠文書を示す。

日時（1945年）	午前	午後
9月22日（土）	ノーマンら3名、東大で高木八尺と会えず、宮武外骨と会う〔ノーマン日記、外骨日記〕	ノーマン、ウッズワース、ニーランズ、都留宅の夕食に招待される。夜11半頃まで歓談〔都留日記〕
9月23日（日）	鈴木安蔵が都留宅を訪問、ノーマン、都留と会談。天皇制の問題などを議論〔ノーマン日記、都留日記〕	夕食後ノーマンが都留宅に迎えに来て公使館へ。ティルトン大尉らとブリッジ。ノーマン除くウッズワース、ニーランズはこの日まで都留宅に宿泊〔都留日記〕
9月24日（月）	ノーマン、エマーソン、都留の3名で東大、神田古書店街を訪問。高木八尺と昼食〔都留日記〕	都留、太平洋協会にて山田文雄と会談、帰途松尾松平に会い、IPR再建のことなど話す〔都留日記〕
9月25日（火）		都留、ノーマンを連れ平野義太郎、風早八十二を訪ねる。商大の上田辰之助も同席〔都留日記〕

このようにノーマン日記、都留日記、外骨日記は相互に矛盾してはおらず、整合しているが、鈴木証言（会談は22日とする）だけがそれと矛盾している。また、鈴木は記憶が安定的で、複数のテキストで何度も、都留がノーマンを連れてきたと書いている。これはおそらく、前に書いた文章をもとに後の文章を書いているためであろう。ノーマンと都留が鈴木宅を訪ねた機会も確実にあり、その折の写真（鈴木宅にて、ノーマンと都留が2人で写っている写真）も残っているが、逆に鈴木側がノーマンを訪ねた記憶もまた、鈴木は語っている⁽¹⁷⁾。

⁽¹⁷⁾ 「それから、もう一つ関連しましてね、総司令部自身のことではありませんが、カナダのノルマン氏、これとは戦争前から深い関係があって、終戦後も、彼はいち早く連合軍の一員として来日し、総司令部のなかに一部屋をもらっていました。日本に来たときに、直ぐに都留君を通して、私の家にも来たとし、私も数回ノルマン君を訪ねました」（憲法調査会、憲法制定の経過に関する小委員会第21回

したがって、この日については鈴木の記事違いという可能性も十分ありうる。

憲法研究会案の内容につながったかもしれない注目すべきこの機会には、ノーマンと都留の日記が示すように、やはり23日に鈴木側がノーマンを訪問したと見るのが、最も整合的である。